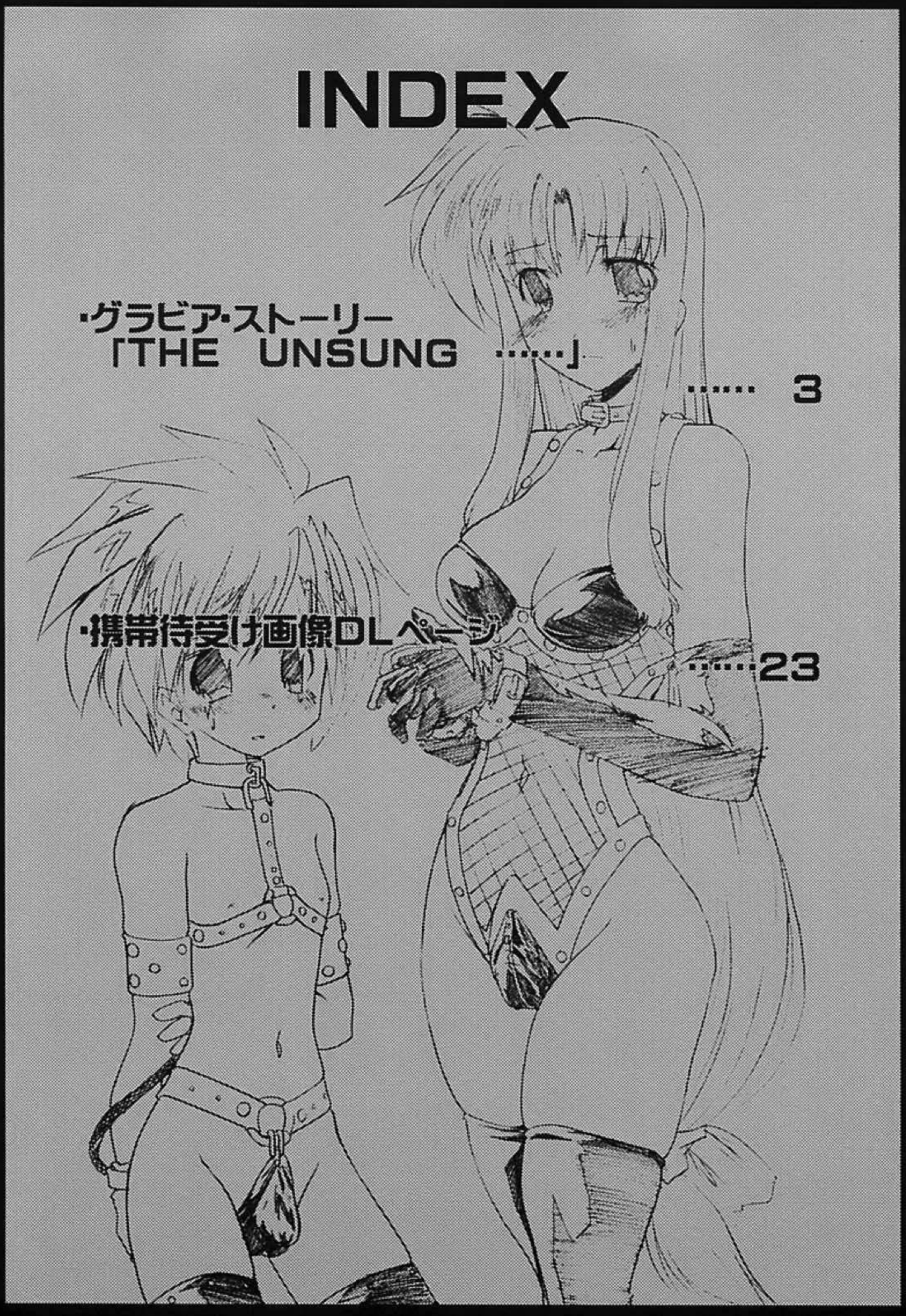
海鳴要塞 2007

海鳴要塞2007
Fortress UMINARI
CODE-2007
WARP Co. Presents

INDEX

・グラビア・ストーリー
「THE UNSUNG ……」 …… 3

・携帯待受け画像DLページ ……23



Gravure Story

THE UNSUNG ……

45ACP

夜――――。

「どうしたの、エリオ？こんな時間に」
　フェイトさんはあくまでいつもと変わらない口調で優しく声をかけてくれた。
　でも僕は知ってる、こういう時のフェイトさんは……"すごい"。
　この前からそんなに日が経ってないはずだけど、どうしたんだろう…？

　……そういえば、高町隊長は今夜は本局での会議で戻らないと言ってたっけ・・・。

（ああ、そういうことか）

　ちょっと曖昧だけど、なんとなく納得できる理由を見つけて、僕は少し安堵した。

『すみませんフェイトさん、なんだか、寝付けなくて……それで…』
「フフッ　私と同じだね。さっきから胸がドキドキして……止まらないんだ」

　それは僕もだ。部屋を出てから、僕の胸はずっとはじけるくらいに高鳴っている。
　数瞬の後、意を決して僕は口を開いた。

『フェイトさん、一緒に寝…寝てくれませんか？』

「寝る？　寝るって、どっちの意味？」

　フェイトさんの視線が、僕の目とまっすぐに向かい合う。

「二人で一緒に、「リ」の字になって寝るの？
私はそれでもいいよ、エリオと一緒なら…」

　あくまで平静を保っていたフェイトさんの声色が、ここで一瞬途切れた。
　僕はその続きを待ったが、フェイトさんは言葉ではなく、キャミソールの裾が擦り落ちる衣擦れの音でその後をとった。

「それとも……"いつもの"意味のほう？」

　折り曲げた右足でキャミソールの裾が後退し、その奥にあるものを垣間見せる。
　僕は恥ずかしさと罪悪感で頭が沸騰しそうになる。けれど最後の理性を総動員して、目をそらすことだけはしなかった。
　それは女性にとって、とても失礼なことだと教わったからだ。

『その……いつもの、意味のほう、です……』

　僕の声は少し上ずっていたかもしれない。フェイトさんはそれに気づいたのか、喉の奥でかすかに笑ったようだった……。

――――チュプッ　チュパッ

いつもの儀式が始まる。
僕はフェイトさんの片脚を持ち上げ、その爪先に舌を這わせた。

前にヴァイス陸曹が僕に見せてくれた(というか、無理やり読まされた)本だと、こういうとき、女性は何日間も履いたストッキングや靴を舐めさせるらしいけど、フェイトさんの脚からは、ナイロン生地と、ほのかな石鹸の香りしかしない。

フェイトさんの優しさ、なのだと思う。だから僕は、その気持ちに精一杯応えようとして、一心不乱に舌を這わせる。

「フフッ、くすぐったい…　エリオは、上手になってきたね？」

楽しそうに言いながら、呼吸が速くなっているのがわかる。
舌先がフェイトさんの親指をなぞるたび、ピクン、ピクンと反応する。
僕はその振動が僕の体に伝わる度、胸の中でなにかが熱を纏っていくのを感じていた。
それが大きくなり、形を為しはじめたとき、フェイトさんは急に脚を引っ込めた。

『？　フ、フェイトさん・・・？』
「ありがとう、エリオ。次は私の番だね……」

促されるまま床に脚を開いて座った僕の股間に、さっきまで僕が"ご奉仕(ヴァイス陸曹の本ではそう書かれていた)"していたつま先が伸びてきた。

『あ……っ』
「ココ、硬くなりかけてるね？」

そのとおりだった。スパッツの中で僕のおちんちんは、ムクムクと起き上がり外からクッキリと見えるくらいにまでなっていた。

グッ　　グニッ

『んっ…ぁ…』

黒いニーソックスにつつまれた爪先は、始めは円を描くように、そして次第に触れているものの形にあわせて微妙な圧力を断続的にかけながら、なぞってきた。
それがスイッチとなっているのか、僕の口からはフェイトさんの爪先の動きにあわせるようにして声が漏れた。我慢しようと喉に力をこめても、声はどうしても出てしまう。

少しすると、爪先の当たるところがだんだんと熱を帯びてくるのがわかった。

「エリオは体も心も、素直でいい子だね♪」

言葉の真意はまだよく理解できなかったが、何故かうれしく感じる。股間の熱も、その一言でまた一段と温度をあげたのが、フェイトさんの爪先の感触の変化ですぐわかった。

僕のおちんちんが硬くなりきった頃、フェイトさんはベッドの片隅に手を伸ばして、おもむろになにかをもって来た。

「それじゃぁ準備運動は終わり。そろそろ始めましょうか？」

————ジャラッ

鎖の付いた首輪だった。それを目にした瞬間、僕の体は電流が走ったように硬直し……そして内側から湧き出る期待感でまるで氷が溶けるように弛緩した。

『はい……』

これからされることを想像して、股間の熱がいよいよ最高潮に達しようとしてるのを感じながら、僕は立ち上がった。
フェイトさんの向こう側には、トルソーに着せられたPVCのボンデージコルセットがあった。

(これから、フェイトさんはアレに着替えるんだ…
そして僕は……)

考えるまでもない、僕にはあれが————フェイトさんの手にあるあの首輪と、セットになる拘束具が用意されてるのだ……

フェイトさんから受け取ったのは、エナメルの光沢がある真新しい拘束具だった。

『フェイトさん、これ、新しいモノですか？』
「そう、エリオの身長も日に日に大きくなるし、いつまでも前のままの首輪だと、プレイの最中危ないでしょう？」

たしかに、最近は手枷や首輪がちょっときつく感じてたかも。僕はてっきり、それがヴァイスさんの本に書いてた、「拘束されるだけで感じる」事なのかと思ってたけど……。

「どうしたの？初めてだから着付けがうまくいかない？」

ハーネスをようやくつけ終わった僕の後ろから、すでに着替え終わったフェイトさんがやってきて、僕の両肩に手を添えながら聞いてきた。

『あ・・・ハイ、ちょっと、前までのと勝手が…』

リンスの香りが残るフェイトさんの髪の匂いに戸惑いながら応えると、フェイトさんはそのまま僕を右に向かせた。

「それじゃぁ、あっちで私が手伝ってあげる。
ほら、おいで……」

「ホラ、簡単だったでしょ？」

　数分もたたないうちに着替えは終わった。

「ね？よく似合ってるよ、エリオ」

　新しい拘束具は黒のエナメル製で伸縮性があり、僕の体をきつく締め付けるでもなく、けれどハッキリと、肌に存在を主張していた。

「拘束感はそんなにないけど、裏地は優しい感触だし、ずり落ちないから少しくらい激しいプレイでも安心よ」
『フェイトさん……あ、有難うございます…』

　フェイトさんはプレイのときも、いつもと同じように僕のことを気遣ってくれている…。
　それが僕にはたまらなく嬉しく……けど、最後の一言が気にかかった。

＜――少しくらい激しいプレイでも――＞

　……今夜は、激しいん…だ……。
　僕は、これから始まる長い夜を想像し、小さな不安と、大きな期待の両方を感じていた…。

「んっ…　んむ　…　うむっん……」
『ふ…ふぅっん……ぁむっ　　う…』

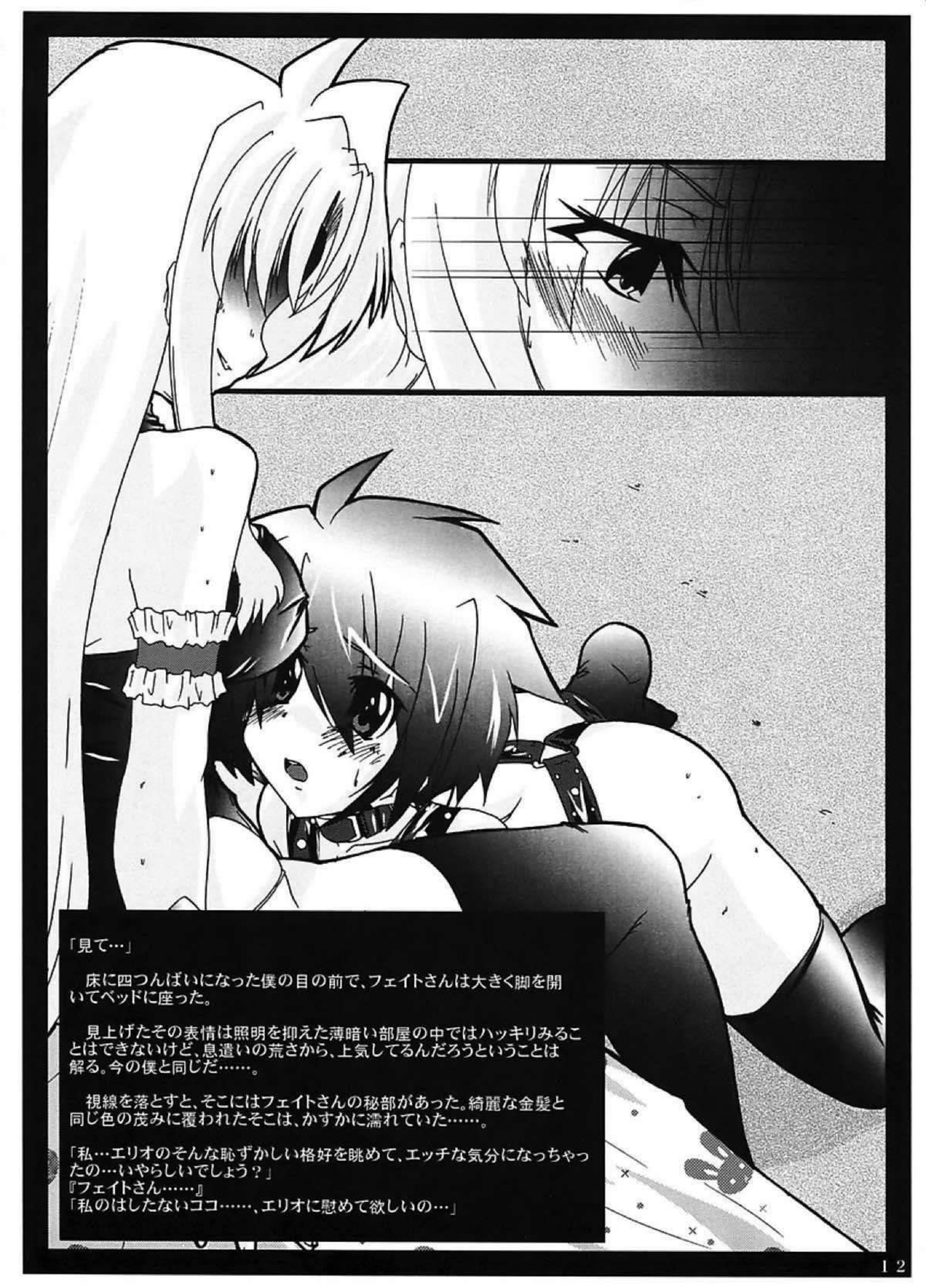
最初はいつも、キスからだと決めていた。
僕もフェイトさんも、ただただ無心にお互いの唇と、その奥にあるものを求め合う。
フェイトさんとこんな関係になった最初の頃は、「キスなんて…」と思っていた。その後にある、プレイの事ばかりを考えていたから…

……けど、今は違う。この時間がとても貴重に思えてきた。
フェイトさんの唇、肌、息遣い…。そのすべてをこんなにも身近に感じることができる瞬間が、他にあるだろうか？

僕はかすかに瞼を開いて１０センチもない距離にあるフェイトさんの瞳を見る。その紅い輝きは僕の視線と絡み合い、かすかに潤んでいるように見えるのは、僕のきのせいだろうか？

「――――――――っ　ん…」

最後に一際長く唇を吸いあって、胸にわずかの喪失感を覚えながら、僕らはようやく離れた。



「見て…」

床に四つんばいになった僕の目の前で、フェイトさんは大きく脚を開いてベッドに座った。

見上げたその表情は照明を抑えた薄暗い部屋の中ではハッキリみることはできないけど、息遣いの荒さから、上気してるんだろうということは解る。今の僕と同じだ……。

視線を落とすと、そこにはフェイトさんの秘部があった。綺麗な金髪と同じ色の茂みに覆われたそこは、かすかに濡れていた……。

「私…エリオのそんな恥ずかしい格好を眺めて、エッチな気分になっちゃったの…いやらしいでしょう？」
『フェイトさん……』
「私のはしたないココ……、エリオに慰めて欲しいの…」

「んっ…ぁ…　ふぅっ……んっ　あン、あぁ…
エリオ…」

　フェイトさんの秘唇の周りを舌でなぞる度、僕の頭上から甘く、切ないため息交じりの声があがる。
　両手で太ももの内側を、痛くない程度に抑えて、自分の頭部が入るくらいの余裕を作ると、僕はそのまま顔をうずめ、一心不乱に舌を動かし続けていた。

「…ぁ　　ぁあ、あ…」

　息遣いの中に埋もれていた声が、次第にはっきりと形を成してくる。

『(…前から思ってたけど、フェイトさんって僕とおなじ"M"なんだろうか……？)』

　そう重いながらも舌は休めない。だんだんと大きくなってくる声と、痙攣にも似た体の反応には、まるで僕がフェイトさんを責めているような錯覚さえ覚えた。

「ふっ…ふぁ……ぁ、え、エリオ、も、もういいわ。じ、上手ね……ご、"ご褒美"をあげる…」

　息を整えながら口にした「ご褒美」という言葉に僕の体が反応する。
　僕は頭を離し、両手を後ろに組んでフェイトさんを待った。
　"ご褒美"――――次は、僕が今のフェイトさんのようにはしたない声を上げる番だ……

『ぁ…あっ！　痛……っ！』
「ほら、今のうちにしっかり剥いておこうね？」

　大きく、硬くなったおちんちんの先から、焼けるような痛みが走った。同時に、フェイトさんの左手の力が強くなる。
　……かと思うと、急に力が弱くなる。フェイトさんの左手は、人差し指から小指まで、まるで波のような動きで僕の敏感な部分を愛撫する。こんな責められ方は初めてだ。先端の痛みと、その下から強くは無いけど絶えず与え続けられる快感がごちゃまぜになって……

『…ぁ　あっ　あああ……』

　僕はまるで女の子のような声を上げてしまっていた…。

「これが"ご褒美"。エリオはえっちな子だから、すぐオナニーしちゃうでしょ？でも、ちゃんと剥かないままつづけちゃうと、大人になってから困るから、今のうちから、皮を延ばさないオナニーの仕方を教えてあげる…」

　指の腹を使って揉むのか……と理屈を考えてられたのは最初のうちだけで、それを過ぎると僕の頭はもやがかかったかのように↖

↘感覚が鈍っていく。
……違う、逆だ。全ての感覚が股間に集中して、過負荷(オーバーロード)状態になってるのだろうか？

けれど、フェイトさんの手や、触れ合っている体、体温の全てまで感じなくなってるわけじゃない、むしろ暖かくて、安心さえ感じるとは……

『あっ　あンっ！あっあっあっ…』
「気持ちいいのね？」
『ハ……あ…は、ハイ…っ！あんっ！』
「ちゃんと自分の口で言いなさい、どこが気持ちよくて、どうしてもらいたいのか、さぁ」

どうしろといわれたのか、僕の頭ははっきり理解してはいなかった。けれど真っ白になっていく意識とは逆に、僕の体は"ご主人様の命令"を正確に認識し、実行に移した。

『あ・・・、お、おち…あンっ　…おちんちんがっ…きも、キモ、気持ちいいで…すぅんっ！
もっと、もっと僕のおちんち・・・を、イジ、イジメ…ぁ・・・ぁぁぁあああああっ！！
ひぁぁ…い、イクっ　イクゥっ！！』
「え…ち、ちょっと、エリオ、だめよ、まだ、まだイっちゃd……っ！？」

「……エリオ」
『！は……はい……』

ああ……怒ってる…フェイトさん怒ってる…

「私、いつも言ってるわよね・・・覚えてる？」
『あ…えと……』
「忘 れ た の ？」

うぁ……うわわ…

『い、いえっ！あ、あの…ふ、フェイトさんのお許しがないまま、イってはいけない…です……』
「そうよね……それじゃ、これは？」
『あ…えと、ぼ、僕のせ、精液、です……』

気まずい間……あうう…

「・・・ふーん(ペロッ」
『あ……』

フェイトさんはおもむろに、鼻の頭にかかった僕の精液の滴を指で掬うと、舐めてしまった……そして少しの後、あの紅い瞳に少しの怒りと多分に含んだ"期待"の色を添えて、

「じゃぁ、<お仕置き>だね？」

と、宣告したのだった。

『！！…ま、まさかそれを？！』
「そうよ？さっきは加減を忘れて本気で責めちゃってた私も悪かったし、特別に、エリオの好きなものを使ってあげるからね」

フェイトさんの股間に生えたその"モノ"……それを目にした瞬間、僕は思わずお尻をすぼめた。

男性の持ってるものと同じ場所にありながら、決定的に違う突起を三つも備えたグロテスクな棒…
フェイトさんはコレを、「ペニマグラ」と呼んでいた。僕がプレイで失敗したときに使われるお仕置き道具はいくつかあるけど、これはもっとも恥ずかしくて……
……気持ちいい……。

「エリオのお尻はこのくらい、なんともないものね」
『あ、ぅ……』

顔が真っ赤になるくらい恥ずかしいけど、事実だから何も言えない。もっと太いモノでお仕置きされたことも少なくない…
ペニマグラの先端は、フェイトさんが垂らしたローションが照明を反射して、テラテラ光っていた。

『(アレが…これから、僕はアレに貫かれちゃうんだ……はしたない僕の、罰として…)』

硬く閉ざしたお尻の奥で、かすかに溶け出す「なにか」があることを、僕は自覚せざるを得なかった。

――――プチュッ　グチュ……

『あっ！んぅっ！　あふぅっ……！』
「まずはエリオのお尻が裂けないように、じっくりとココをほぐしてあげないとね？」

　僕のお尻の中で、フェイトさんの指が動くたびに、僕の口から声が漏れる。
　なんとか我慢しようとしても、さっきフェイトさんにおちんちんを踏まれたときと同じように、止めることは出来ない。

『ひぁンっ！　あぅ！…ぁ…ぼ、僕、男の子なのに……こん…なぁっ？！』
「エリオだけじゃないわ、男の子はみんな、ココに弱点があるの。どんな強い子でも、ココを責められると……ほぅらっ(ぐにっ」
『ひっ…ぁぁあああああっ！！』

　お尻の中の一点を、指が一際つよく押した途端、僕の声も一段大きくなった。

『(スゴイ……こ、これ、あのペニマグラで突かれたときと同じ……？！)』
「ふふっ…もしかして気づいた？ココが"前立腺"っていうの。男の子が、女の子の気分を味わえる場所よ」

　まるで電流が走ったような刺激だった。一瞬息が止まるくらいの快感に、僕は大きくのけぞる。

「エリオ……本当に可愛いよ。アヌスもこんなに大きく開いて……そろそろ大丈夫ね」

『あ…あむ…んく…』
「ふふっ、これから自分を貫くモノだから、念入りにね？」

既にペニマグラはローションまみれだったけど、僕はそれにも関わらず、一心不乱に自分の唾液を摺りこみ続けた。
フェイトさんはどんな表情で僕を見下ろしているだろう？
これからペニマグラによる処刑を待つだけの僕は、頭上のフェイトさんの顔を見上げることが出来なかった。

「……さぁ、もういいわ。お尻を突き出しなさい」
『はい……フェイトさん』

言われるままに、僕はペニマグラの先端に自分のお尻をあてがう。

「それじゃぁ、エリオ。始めなさい」
『…ぁ…はい……。僕は、ふ、フェイトさんの言いつけを守らず、粗相をしてしまいました…。どうか、この罰をもって、お許し、くだ…さい……』

お許しの言葉の代わりに、フェイトさんの両腕が、僕を抱きしめた。

「許してあげる。……愛してるわ、エリオ」

両腕に力がこもり、僕の体を一気に押し下げる
それは、フェイトさんの愛情、そして、僕の処刑執行の言葉だった。

『――――はヒィっ！？』

あ……ぅ…ス、すごいっ…！

「事前にしっかりとほぐしたから、痛みはないでしょう？ホラ、さっきの前立腺、どう？ペニマグラの突起がこすってるの、わかる？」
『ハッ……ハヒッ！ぁ…ハ、ハイッヒィッン！！』

も、もう返事すら…できないっ…！！
な、肛内(なか)でハッキリ形がわかるくらい、ぺ、ペニマグラが…ペニマグラがぁぁあっ！！

『アッアンっ！あぅ…はっハォ…アォオッ！』
「ンッ！ふ、フフッ、やっぱりエリオはコレと相性いいみたいね。ちょっと動いただけでホラ…」

やっ！やだ……そんな……
…お、奥まで……っ！！

「……これはお仕置きだけど、特別に許してあげる。"イってもいいよ"？
女性の私にチンポで犯されて、女の子のようにヨガリ狂いながら、イカせてあげるっ！」

やっ…そんな…ぼ、僕、男の子…なのに……そんな、チンポに犯されて…？！

「！　アハッ…エリオ、おちんちんは正直だね、犯してあげるって言った瞬間、ビクンッって反応したよ？
……いやらしい子。私の愛しいエリオ…ほら、もっとヨガリなさい、エリオの可愛いあえぎ声、もっともっと私に聞かせて…ほらっ！」

ズンッ！

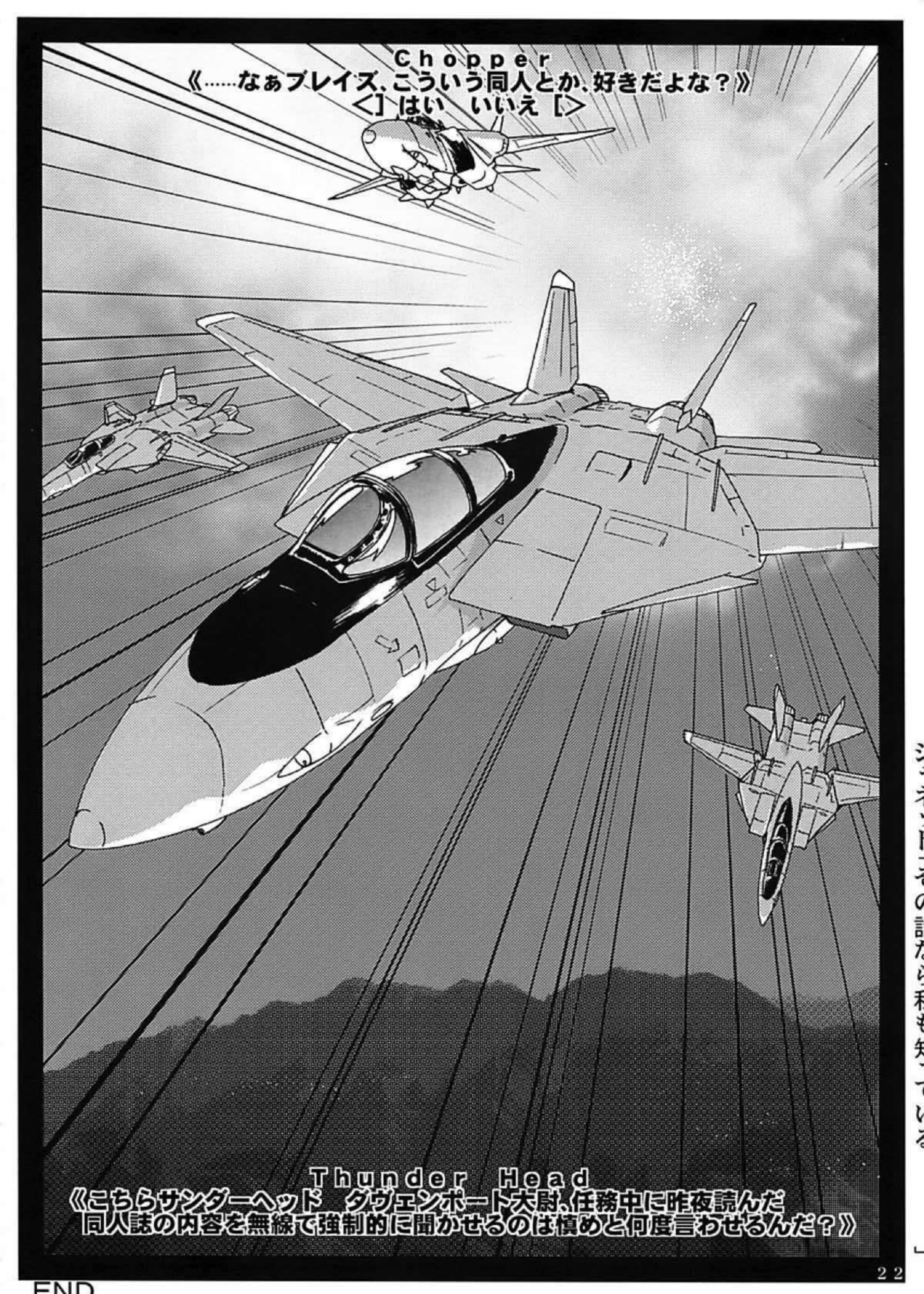
『ひっひぎぃっ！……ぅあン！あん！あ、あああ……ひあぁぁぁ……』

も、もうだめ……お、おちんちんがピクピクして……勝手にイ……っちゃ…

ぁ……ぼ、僕……お尻を犯されて…女の子みたいに……

『ぁぁぁ……やっ、も、ダ……い、イキッイキますっ！けっケツマンコ貫かれて、僕のちん…ちんp……』

Chopper
《……ってのを昨日グリムから貰ってさ》



END

「なぜ話題にされているのか私も知っている」

携帯待ち受画像DL

1枚目はエリオ＆フェイトのパーティドレス姿。

あんな内容のもの描いておいて言うのもナンですが、この二人のカップリングというのは見てて頬が緩むようなほのぼの親子感が良いですね。汚すのがちょっとためらわれるくらいの平和な雰囲気が似合うと思うわけです。

そしてですね…

その幸せな空気をですね……

引き裂いて汚すのがですね！

最高なんですよね！！（逮捕

ま、それはともかくですね、今回も皆様の携帯に、恥ずかしくてとてもじゃないけど入れられないような内容の画像をですね、提供していきたいとおもうわけでしてね……

http://45acp.sakura.ne.jp/3g/erifa01.jpg

携帯待ち受画像DL

チャイナドレスなフェイトさん

第七話「ホテル・アグスタ」のドレス姿は眼福でございました。DVDでより眼福なお姿になっているのを期待しております。

手首や首のアレを見てもお分かりのように、これもいわゆる「ボンデージ絵」です。ていうか、自分いままで、こういう道具やシチュエーションのないフェイトさん絵を描いた記憶が数枚分しかございません。

多分このくらいの待ち受画像なら…大丈夫だよね？ちょっと困り顔だけど大丈夫だよね？

ぱんちゅ見えてるけど大丈夫だ……ん？

http://45acp.sakura.ne.jp/3g/chinafate.jpg

携帯待ち受画像DL

エリオ＆フェイト　ボンデージ

夏コミ当選時の告知用イラストです。これを描いた頃は、まだ本の内容が定まってなかったので、二人ともM役のように描かれています。

手前の布にはサークル配置が描かれてました。しかも表現上良くないものは見えなくなっているステキな面積です。

これなら、きっと待受画像にしても恥ずかしく……

……んー？

http://45acp.sakura.ne.jp/3g/erifa02.jpg

携帯待ち受画像DL

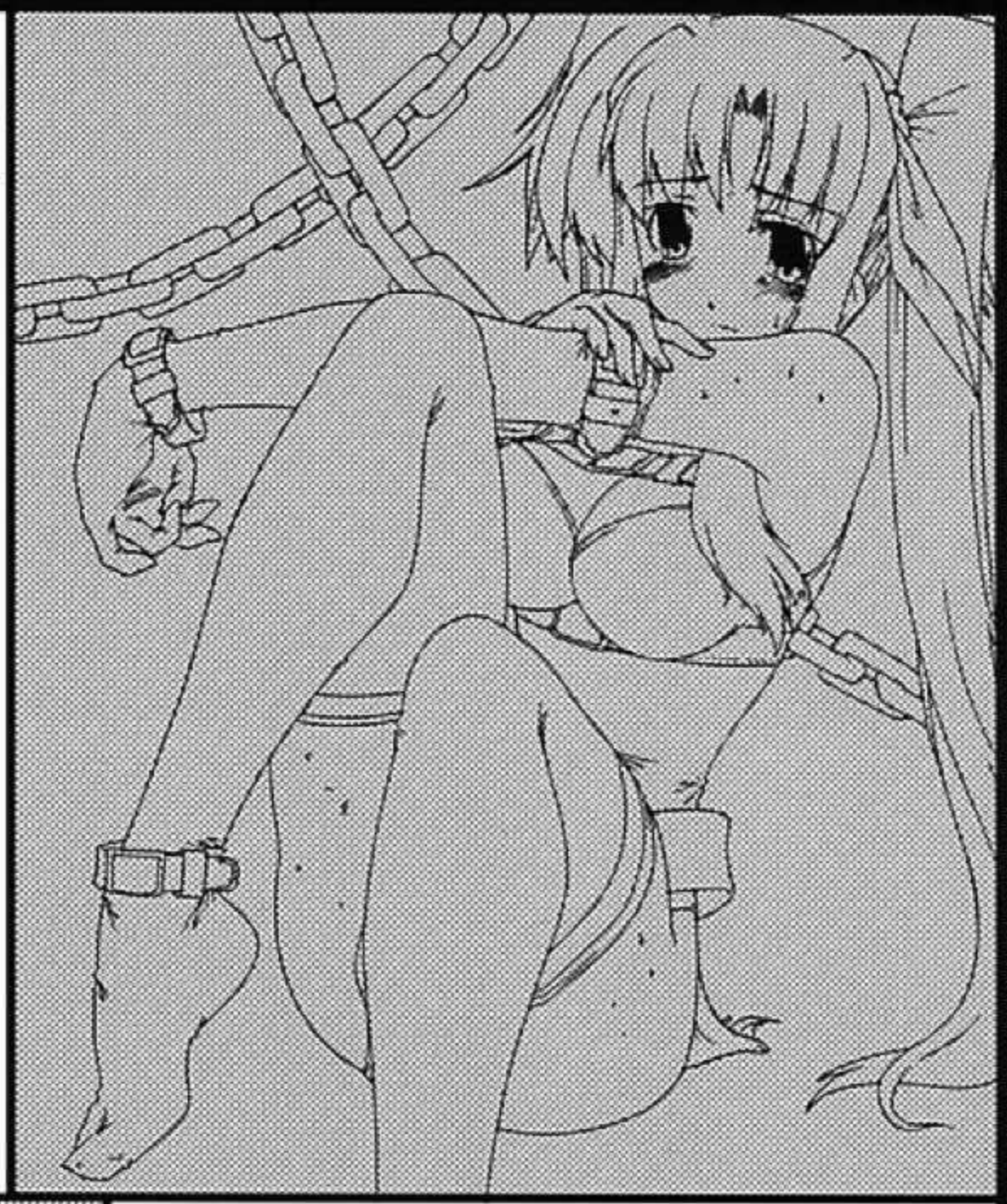
本誌「海鳴要塞２００７」表紙です。

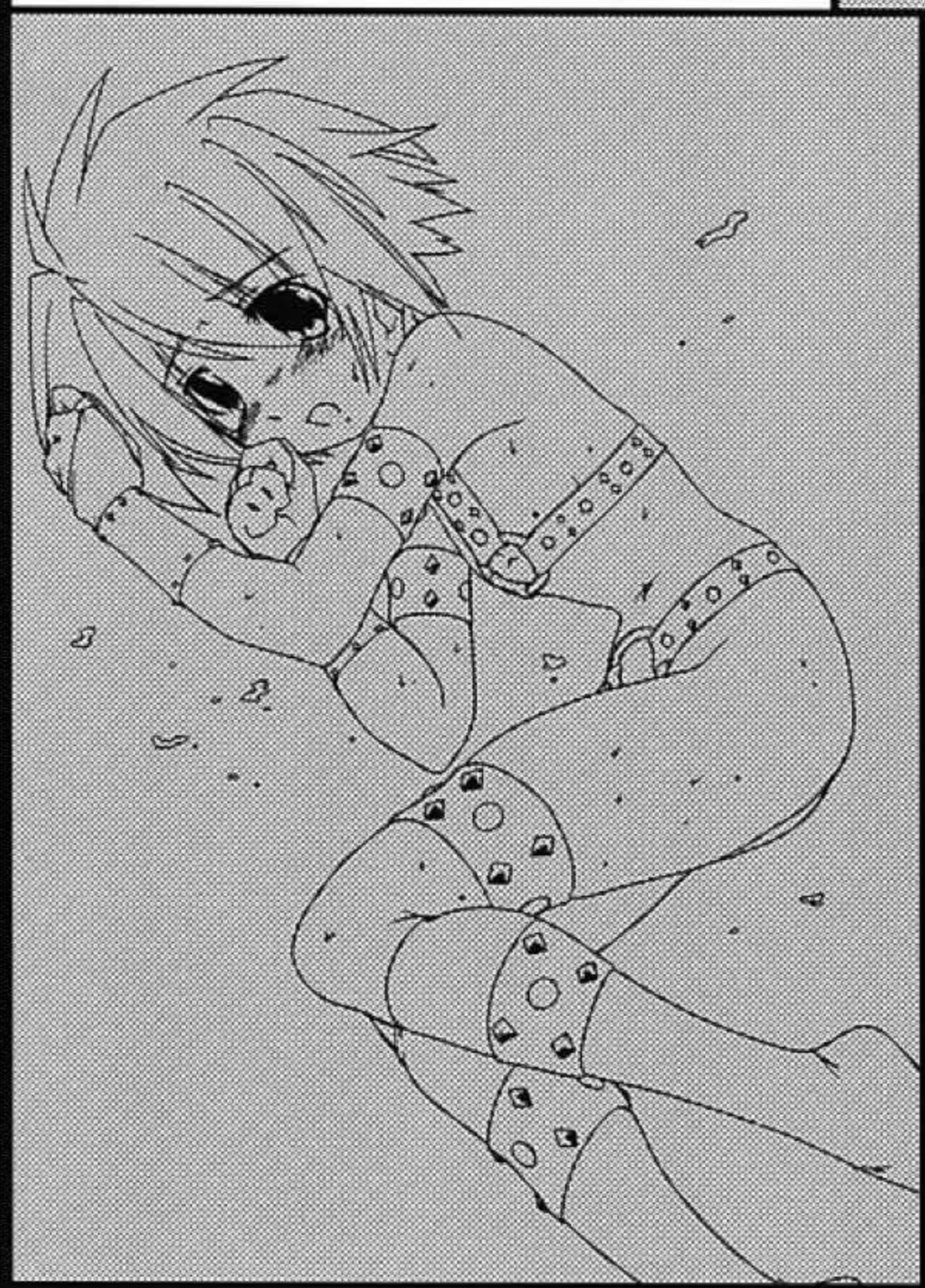
フェイトさんは元々のバリアジャケットそのものがボンデージ的方法論なので、この手のモチーフは非常に相性よくフィットします。

大人フェイトのBJも、ベルトや首輪などの直接的なモチーフこそなくなってますが、「なんかSS将校っぽい」という雰囲気は、そのまま海外のSM文化に通じるわけで、その意味ではむしろ大人フェイトは隠喩的な意味でよりSM的であり、フェティシズムの体現者であオォールハィルブリタァ～ニァ！

……との主張をですね、ウチの飼い猫にしてみたんですがね、アイツ目の前で草吐いて逃げやがった！

http://45acp.sakura.ne.jp/3g/cover.jpg





同じく裏表紙。

男性用ボンデージっていうのはSMファッションの１ジャンルとして確立されてるらしく、ネットで調べると膨大な量の情報が手に入ります。

…という書き方をすると事の本質が伝わらないので修正します。

「ネットでイメ検するとワラワラと砂吐く画像が出てくる」

……ということです。

モデルになってる男性がおしなべて無表情なのは、SAN値にかなりの大ダメージです。

やっぱわぁいは二次元に限るな！

http://45acp.sakura.ne.jp/3g/b_cover.jpg

破滅的なフシギどもあとがき

どうも45ACPです。
今回は
「エースコンバット6　発表記念作」
である本誌を手にとっていただき、
誠にありがとうございます(えー。

当初はエリオ&フェイトがドローンに捕らえられて触手や媚薬やギロチンでパヤパヤされちゃうのを予定してた……んですが、それって前回の本と同じ展開じゃねぇの?!ってのと、劇中での時間経過がタイトで、どうも本編にこのお話をもぐり込ませる時間的余裕ないみたいなので、少々マイルド方向に路線修正することにしました。

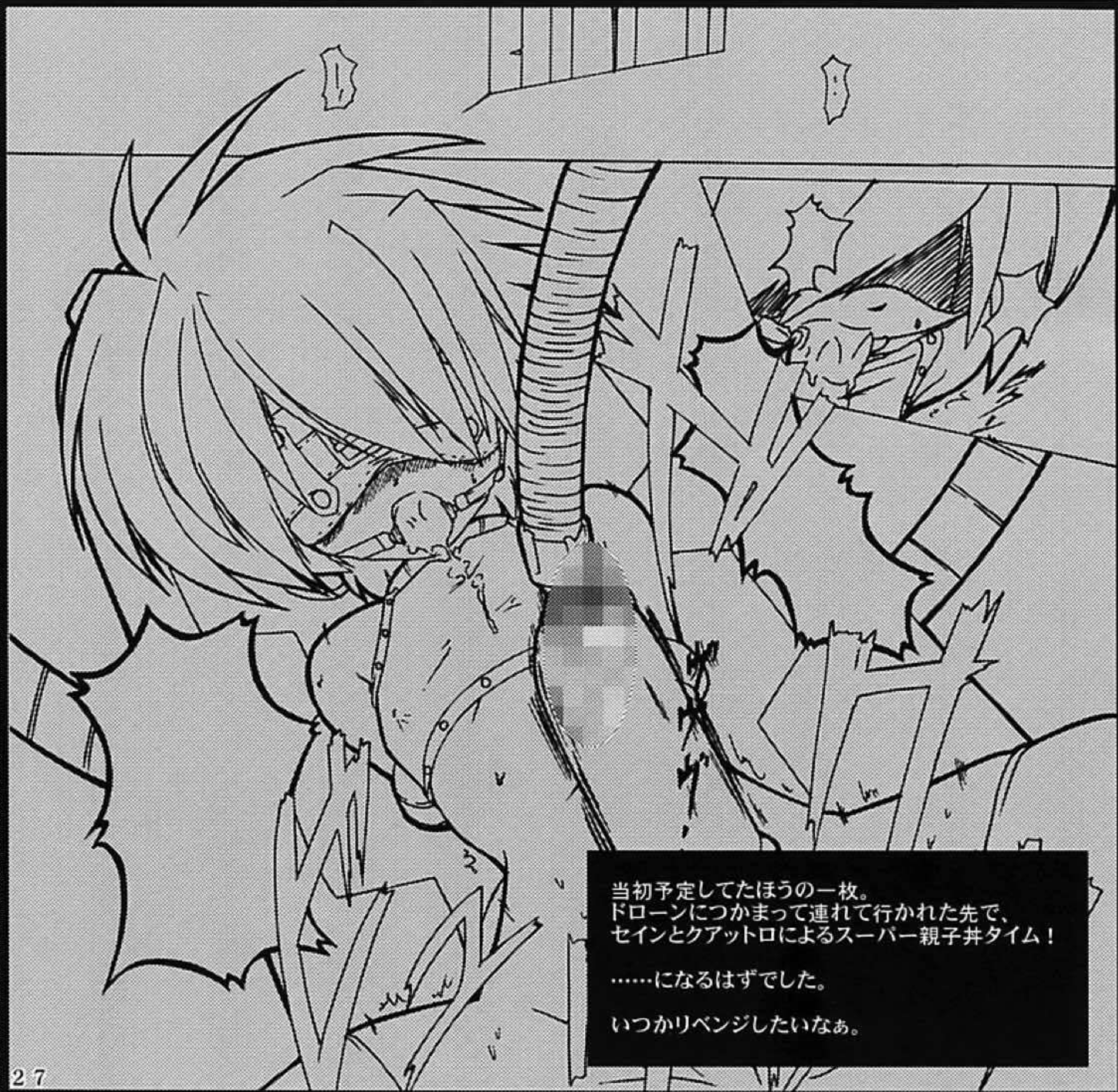
あ、あとこの本書いてる最中に17話が放映されたわけですが、エリオの過去の重さと自分が書いてる内容のアレさ加減のギャップがすごい、その、なんていうんですか、うん……

「申し訳ない」

と……いう気分でですね、なんかPCの前で気まずくなりながら作業してました。
アハハー　バカだ俺ー?!

さて、次回は順当に行けば冬コミ……になるんですが、まだ未定です。リンディさんなんだか相変わらずお若いっていうか、むしろ若すぎね?これはつまり…そう!年増園開園ですっ!!(ゾクッ)
…という形でモチベが生まれつつあるので、次回もスーパーハラオウン家タイムかもしれません。

2007年8月
45ACP



奥付

海鳴要塞2007

発行日　　2007／08／19

発行者　　45ACP

URL
http://45acp.sakura.ne.jp/

e-mail
giro@45acp.sakura.ne.jp

This contents was printed by Tokyo Shimaya Printing Co

Mobile QR

Fortress " UMINARI"
CODE－2007
WARP.Co Presents
FOR ADULT ONLY